

CONTENTS

カントボーイ、初めてのクリイキ♡

含まれる要素

**カントボーイ
クリイキ
乳首責め
玩具責め
挿入
焦らし
寸止め
言葉責め**

人物紹介

四季風瑠夏（しきなぎ るか）

183 センチ/68 キロ

顔がとにかく良い。自分の名前が好きじゃない。目が悪い+目立たないために黒縁眼鏡をかけている。両親は幼い頃に離婚しており、父と二人暮らし。

父が女の子を望んでいたこともあり、中学生まで、家で女の子の服を着せられていた。声変わりし、身長が伸びてからはなくなったが、性的虐待も受けていた。その頃の記憶が、性格を歪ませている。冬野に執着している理由は、過去の自分と重ねているから。冬野への哀れみと逃がしたくないという独占欲が、同じ場所から湧いている。

冬野稀（とうの まれ）

168 センチ/52 キロ

カントボーイ。それ以外は至って普通の学生。

四季風の顔が好き。流されやすい。

自分の名前にコンプレックスを感じている（その名前が自分の異常さを言い当てているように感じるため）。

カントボーイ(処女)、初めてのクリイキ♡

プールの授業は、いつも見学だ。

冬野稀は、フェンスの日陰に体育座りをして、水しぶきを上げるクラスメイトを眺めていた。

単位修得のために書かされるレポートの紙に、当たり障りのないことを記していく。

誰にも知られてはいけない身体だった。

性自認は男だ。力は弱いし、筋肉もつきにくいけれど、骨格は男だ。普段も男の格好をしてるし、男として振る舞う。女に間違えられたことなんて、今まで一度もない。

けれど下着を脱げば、そこには女の特徴がある。子宮もあるから、生理も来る。生で男とセックスすれば、妊娠する可能性もある。

冬野は自分の身体が嫌いだし、名前も嫌いだっ

た。

稀——めったにない、珍しい。親はどんなつもりでつけたのか知らないが、冬野にとっては、自分の異常さを言い当てられているみたいで、呼ばれるたびに肌が粟立った。

プールサイドで笑う同級生を見ながら、冬野は

思う。あの中には、混じれない。普通の世界に、自分は存在できない。

そういう人生なんだと、もう諦めていた。

——四季風瑠夏に出会うまでは。

四季風とは、高校二年にあがって、初めて同じクラスになった。

顔が良くて、背も高くて、とにかく目立つ男だった。だから当然、遠い存在だと思っていた。なのにどういうわけか声をかけられて、気づけばつるむようになっていた。

四季風は、他の連中と違った。冬野が体育を見学していても、着替えをトイレでしていても、理由を詮索してこない。その距離感がありがたかった。

多分、あんまり人に興味がないんだろう。

四季風は何をしても目立つから、いろいろと苦労しているようだった。つまり、自分という存在は好都合なのだ。冬野は人を避け続けているから誰も話しかけてこない。そんな冬野と一緒にいれば、話しかけづらい。

合理的な判断だ。

「ねえ、稀くん。今日、家に遊びに来ない？」

だから、そう言われた時、冬野は耳を疑った。

あんまりにも自然な誘い方だったから、冬野は、断る理由を探すより先に、頷いていた。

「……いい、けど」

「よかった」

放課後になって、そのまま四季風の家に向かった。

四季風の家は、一軒家だった。両親は仕事なのか、家の中は静かだった。

二階にある四季風の部屋のローテーブルに教科書とノートを広げて、宿題をする。シャーペンの音だけがして、あとは、静かだった。けれど、居心地は悪くない。無理に喋らなくてもいいのだから。

問題を解き終えて、顔をあげると、視線とぶつかった。四季風が、じ、と自分を見つめている。何か言いたげな、けれど、迷っているような顔。そんな顔、初めて見た。

「……なに？」

「……」

四季風は、眼鏡のブリッジに指を添えてから、ぽつりと言った。

「僕さ、自分の名前、あんまり好きじゃなくて」「え、」

「瑠夏、って。……女の子みたいな名前でしょ。お父さん、女の子が欲しかったんだって。だから、名前も男っぽくないんだ。中学生に上がるまで、女の子の服着せられてたりもしてた」

唐突な身の上話だった。冬野が戸惑っていると、四季風は、シャーペンを置いて、続けた。

「その頃の写真が家に残ってて。それ見ると、吐き気がする。これが僕じゃなかったらいいのって思う」

軽い口調だった。けれど冬野は、なんと返せばいいのか、わからなかった。

言い淀んでいると、四季風が、こちらを見て、ふ、と綺麗に笑った。

「こんな話、誰にもしたことなかったんだけど」「……うん」

「友達の稀くんには、言いたくなかった」

そう言って、四季風は、唇の前に、人差し指を立てた。

「秘密ね」

その一言に、胸の奥が、きゅ、となる。

誰にも知られたくないこと。四季凧は今、自分にだけ、預けてくれた。秘密ね、という言葉が、二人のあいだに細い糸を結んだ気がした。

——それなら。

四季凧になら、言ってもいいかもしれない。

自分の体のことなんて、誰にも言ったことがなかった。言えるはずがなかった。けれど四季凧が、自分の柔らかいところを見せてくれたから。

「……俺、」

膝を抱えて、冬野は、声を絞り出した。

「俺の身体、変なんだ」

「……変って……？」

「……」

なんて言おうか迷う。四季凧は急かさなかった。ただ、静かにこちらを見ている。その視線に押し出されるように、冬野は言葉を続けた。

「……ついてないんだ、あれが。かわりに、女の、……が、ついてて……」

膝に顔を伏せる。途端に後悔が押し寄せてきた。この半年が終わる気がする。気持ち悪いと思われ

る。もう二度と、こうして会えないかもしれない。

「……しってたよ」

「え？」

「そういう身体で生まれてくる子もいるって本で読んだ。君、プールも見学してるし、着替えもトイレでしてるから、きっとそうなんだろうなとは思ってた。聞いたら嫌だと思ったから、聞かなかったけど」

「……そう、だったのか、」

冬野は、顔を伏せたまま、詰めていた息を、ゆっくりと吐いた。

「……気、使ってくれてたんだな」

拍子抜けした、というのが、気持ちとして近かった。あんなに、こわかったのに。こんなに、覚悟して打ち明けたのに。四季風はとっくに気づいていて、それでも、何も変わらずに、隣にいてくれたのだ。張り詰めていた肩から、力が抜けていく。

けれど、安心しきった、その時だった。

「……見せてもらえたり、する……？」

「……え、」

思っても見ない言葉に、顔を上げる。四季風が

面白がっている様子は、ない。ただ、まっすぐな目とぶつかる。それがかえって、冬野を怯ませた。

「むりだ、それは」

「なんで」

「だって、……気持ち悪い、し……」

「気持ち悪くないよ。……けど、本当かどうか、知りたくて」

「いやだ！」

反射的に、大声が出た。

……やっぱり、話すんじゃなかった。

四季風はそういうやつじゃないとわかっているのに、いやな考えが止まらない。

見せろだなんて、やっぱり、興味本位だったんじゃないか。弱みを握って何かをするつもりなんじゃないか。一度あふれた疑いは、勝手に膨らんで、冬野の頭の中を、ぐるぐると回った。

「……………帰る」

立ち上がると、腕をつかまれた。逃げ出したいのに、四季風の力が強くて、かなわない。こんな身体じゃなければ振り払えたんだろうかと思うと、涙が出そうになる。

「……離せ、」

「……ごめんね。僕、友達付き合いあんましたことないから。……怖がらせちゃったね」

四季凪が眉を下げる。その声があんまりにも萎れていたから、胸がちくりと痛む。

「……そうだ、」

そうつぶやいた四季凪は、冬野から手を離した。

何をするのかと思ったら、ズボンのベルトに手をかけている。冬野が呆気にとられているうちに、ズボンをおろした。

「な、なにして、」

「僕も脱いだら平等かな」

あっさりと、四季凪は下着も床に落とした。

男の、性器が、視界に飛び込んでくる。

思わず、目を逸らそうとして——できなかった。初めて、間近で見る、男の性器。四季凪のものは、だらりと下がりきっていない。とにかく質量があった。

自分には、ない、もの。

それが、目の前に、当たり前の顔をしてぶら下がっている。息が詰まる。羨望と嫌悪がいっしょくたになって、胸の底で、ざらざらと動く。

冬野は視線を逃がした。けれど、一度見てしま

った残像は、簡単には、消えてくれない。

「男のおちんちん、生で見たのはじめて？」

「……………うん」

「ふふ、僕も医者や家族以外に見せるのは初めてだ」

「え、彼女とかは……？」

「そういうの興味なかったから。初めて興味がわいたのが、君だったんだ」

「……なんで俺なんかに」

「なんかなんて、言わないで。僕はそんな君だからいいんだ。そんな君じゃなかったら、僕は声かけてない」

「……？」

意味がわからず首を傾げていると、四季風は目を伏せた。その先に目を向ける。四季風の性器が、どんどん上を向いていく気がした。

「君に見られて、反応しちゃった。ごめんね」

「べ、べつに……大丈夫、だけど」

「僕、君が好きだから。だから、なんでも知りたくて。こうなっちゃうのも、君が好きだからだよ」

「……え、」

……君が好き。

四季風の言葉を反芻して、胸が苦しくなる。

確かに、自分も、四季風が特別だ。恋といえば、恋なのだろう。

……自分が女の子なら、こんなにもくるしくなることはなかった。

「僕にも見せたくない？」

「……だって、おまえが心変わりしたら……」

受け入れてほしい気持ちがある。

あるからこそ、失うのがこわい。想いを言葉にするのがこわい。

たった一人の友人に幻滅されて、離れてしまったら、立ち直れない。

「……うん、そうだね。気持ちは変わると思う。もっと好きになっちゃう予感がする」

「……それは、ないだろ、」

「ふふ、その反応……僕の告白を受け入れたいと思ってるってことでいいのかな」

「……！ それは、」

「顔真っ赤。かわいいね。僕のこと、すきなんだ？」

「……っ、」

言葉が出なかった。頷けない。頷けないまま、真っ赤になって俯くしかない。

「うーん、……恥ずかしがり屋さんもここまできると困りものだなあ」

四季風は眼鏡のブリッジの位置を直してから、はっとしたような顔をした。

「そうだ、じゃあこうしよう。セーフティワードを決めるんだ」

「……セーフティワード？」

「これを言ったら絶対やめるって合図のことだよ。僕は君のことが知りたい。けど君が『だいすき』って言うてくれたら、もう何もしない。……うん、我ながら、良い作戦だ。おちんちんを出してなかったらもっとスマートだったかな」

「そんな、勝手に、」

だいすき、なんて、言えるはずがない。四季風はそれを見越して選んだのだと、その涼しい顔を見て、冬野は察した。

「じゃあ、はじめるね」

「え、まて、四季風、やだ、」

「やだね。うんうん」

四季風は自分の衣服を整えると、固まっている冬野の前で膝をつき、ベルトを外した。そうしてズボンを下ろしていく。男物のボクサーパンツを

晒したけど、それについて、四季凧は特に何も言わなかった。

「わ、」

抱きかかえられ、ベッドの上に、体育座りで座らされる。そうして後ろから抱きしめられた。背中に、四季凧の体温がぴったりと重なる。それだけで、冬野の心臓が、どくどくと鳴りはじめる。

「そうだ、ひとつ約束してくれる？」

耳元で囁かれて、冬野はぴくりと肩を震わせた。

「……約束？」

「稀くんがイク時は、ちゃんと『イク』って言ってほしいんだ」

「……………は？ み、見るだけ、だろ？」

「君おまんこ見られるの嫌みたいだから、触って確かめようかなって思って。でも君、こういうの耐性なさそうだし、すぐに気持ちよくなっちゃうかもしれないでしょ？」

「……」

それはつまり、今からそういうことをするということだ。

冬野はそもそも、イクという感覚自体、わからなかった。自慰はするけれど、女性器をいじって

快楽に浸る自分への嫌悪と、決定的に何かを踏み越えてしまう恐怖心が勝って、すぐにやめてしまう。

なのに、今から四季風に触られると思うと、胸の奥で、熱がじわり、じわりと灯りはじめる。嫌なはずなのに、止めないといけないのに、どこかで期待している自分がいる。なんだか無性に泣きたくなった。息が荒くなる。すると四季風が、優しく頭を撫でてきた。

「かんたんでしょ？ 『イク』って、言うだけだから」

「……」

「稀くん？ 返事は？」

「……っ、だって、」

「稀くん」

耳の後ろに唇を寄せられて、甘く囁かれる。ぞくぞくと震える身体がおかしい。

「……わか、った、」

おずおずとそう言うと、ぎゅう、と強く抱きしめられた。

「いい子だね」

「……あ、」

膝裏に手を差し入れられて、足を開かさせる。
そして四季風が、下着の上から、そっと股間に添えてきた。大きな手のひらが、布越しに、そこ全体をやわらかく包んでくる。

「動かしていい？」

「っ、……うん、」

「ありがとう」

ちゅ、と耳の後ろにキスされる。そうして四季風はその丸みをおびた布の下の感触を確かめるように、優しくいろんなところを、指の腹で押していった。そして次第に指をバラバラと不規則に動かしはじめる。下から上へ、上から下へ。全体を、さわさわと撫でたり、くすぐるように指を動かしてくる。冬野は落ち着かなく身をよじっていると、つぷりと割れ目の真ん中あたりに指を押し込んできた。きゅう、とお腹のしたに変な感じがして、冬野は身を振った。

「ん、っ、」

四季風の人差し指と中指が、線を描きはじめた。布の中央、割れ目のあるあたりを、つう、と縦に何度もなぞってくる。下から上へ。一往復。二往復。割れ目に沿って、少しだけ指先食い込ませて

いく。

「っ、……」

「うん、君の言ってることはほんとみたいだね。
やわらかい……」

指の腹が、縦の筋を、何度も往復する。じわ、
と熱が生まれて、それが下腹部へ広がっていく。
「気持ちいい？」

「くすぐったい、だけ、」

「そっか」

やがて割れ目を辿っていた指先が、何かを探る
ように、ぐ、と押し込まれた。ちょうど膣の入り
口あたりだ。かと思うと円を描くようにまんこ全
体をなぞられて、またつぶりと指を押し込まれる。
それを何度も何度も繰り返される。

「っ、ふう、……」

「ぬるぬるしてきたね。君のおまんこ、おちんち
んを迎える準備をしてるみたい」

「……え……？」

湿ってきた布の上から、入口のあたりを、く
にくにと押される。

「ここになんか入れたことある？」

「……ない、」

「生理のときも？」

「…………タンポンは、あるけど…………ナプキンあんまり変えられないから……」

「……そっか。それも使ってるんだ。へえ……」

「………………だから、なんだよ、」

「別に？ きっと綺麗なピンク色してるんだろうなって想像したの。……あ、でも、おけけで隠れてあんま見えないかもね。あんまりここ処理とかしてなさそうだし。いま触った感じだとそんなに濃くはないとおもうけど、整えるくらいはしたほうがいいかもね。今度してあげようか？」

「……………いい、」

羞恥で、耳まで熱くなる。下着はどんどん湿って行って、四季風の指が、その湿った布を、割れ目に沿って擦ると、くち、と水音がした。ぬめりが増えたぶん、摩擦がなくなって、じれったい。

「あのね、稀くん。さっきから、ここばかり触ってるけど——」

四季風の指が、割れ目の上のほうで、止まった。

「処女がいちばん反応するの、ここなんだよね」

「……え、あ、」

布の上から、その一点を、つん、と押される。

「ひ、あっ♡!?」

鋭い刺激が走って、冬野は目を見開いた。

「うん、その反応……ちゃんとクリトリスもあるんだね」

四季凧が、耳元で、うれしそうに笑った。そうして布の上から、その膨らみを、指の腹でこすり始める。膨れた芯が、布地と擦れて、じんじんと痺れる。今までとは比べものにならない快感に、冬野は四季凧の腕を握りしめて喘いだ。

「あ、ああ、っ、や、♡」

「稀くんのクリちゃん、ちっちゃくて見つけにくいな……」

「や、っ♡やだ、そこ、ぱっかり、っ♡」

「なんで？ 気持ちいいでしょ。ここ、こすこすされるの」

布越しに、クリトリスを円を描くようにほじくっていく。冬野の呼吸が、少しずつ、浅くなっていく。

「やだ、やだやだ、……！」

「……ねえ、稀くん。オナニーしたことくらいあるでしょ？ 指とか玩具とか挿れたことないのはわかったけど、さすがにうぶすぎない？ もしか

して演技？」

あまりにさらりと聞かれて、かあっと、耳まで熱くなる。

「どうなの？ 教えて？」

「っ、な、なんで、そんなこと、言わなきゃ、…
…っ」

「気になるから。教えて？」

円を描くように擦られながら「稀くん」と優しい声で促されて、冬野は、俯いたまま、途切れ途切れに、白状した。

「……たまに、さわる、」

「うん、そうだよな。どうやって触ってるの？」

「……いま、みたいに、パンツの……上から……」

「直接じゃなくて？」

「……………こわくて、」

消え入りそうな声で、冬野は続ける。

「さわっていると、……なんか、奥が、ひくひく、
してきて、……それが、こわくて、すぐ、やめち
ゃう、から、……」

その向こうに何があるのか、確かめたことが、一度もない。こわくて、いつも、途中で逃げてきた。

四季風が、後ろで、ふ、と笑ったのが、わかった。一度指が離れて、その指を鼻の下にあてられる。何とも言えない、性の匂いがする。

「そっか。……じゃあ、稀くんは、いったこと、ないんだ。自分の身体のこと、なんにも知らないんだね」

「……うん」

「かわいいね。……大丈夫だよ。今日は、僕がいるから」

四季風は、また、割れ目に指を埋めた。クリトリスをこすこすと指を震わせて刺激してくる。指の動きが早くなるにつれて、冬野の呼吸が、どんどん浅くなっていく。

「あ、あ、っ、し、きなぎ、っ」

「ん？」

「やだ、へん、っ、へんな感じ、する、から………っ」

「気持ちいいことしかないから、こわがらないで」

「あ、あ、や、♡……ああッ……!!♡♡」

膣の入り口がきゅうきゅうとひくつきはじめて、冬野は身悶えた。四季風の胸に頭を擦り付ける。

腰が勝手に動いてしまう。

「あ、っ、こわい、っ♡やだ♡こわい……っ」

「気持ちいいね」

四季凧が、あやすように、冬野の頭にキスを落とす。優しい声とは裏腹に、クリトリスをいじる指は容赦ない。

「あ、あ、っ、もう♡、むり、っ、そこ、やだ、やだあ……っ♡」

「大丈夫、大丈夫……」

こすこす、こりこり、と、布越しに、延々と舐められる。膣はひくつき、蜜は溢れ、熱が、下腹部へと、ぐるぐると渦を巻いて溜まっていく。

「ふ、っ、うあ、やだあ!! こわい、やめて……!!」

目の前がちかちかする。必死に四季凧の指から逃れようと腰を動かすけれど、もう片方の腕で冬野の身体をガッチリとホールドされて、逃げ場はない。涙がボロボロあふれてくる。

「……うん、なるほど」

ひとりごとみたいに、四季凧が呟く。

「身体は、ちゃんとイきたがってるんだけどな。頭が拒否しちゃうんだね」

四季凧が、クリトリスを転がしていた指を、ふ、

と止めた。ほっと息を吐くと、何かを握った手が、また股間に戻ってくる。

「これ、使ってみようか」

「え、あ、なん、なんで、」

卵くらいの大きさの、つるりとしたピンクの器具が目飛び込んで、冬野は身を震わせた。

「荒療治だけど、イくのにならなくてもこの先困るからね。ちょっと頑張ってもらおうかな」

「え、ま、まって、やだ、そんな、の、なんで持って……！」

「今はそんなこといいじゃん。パンツの上から当てるから、痛くないよ。安心してね」

問い返す間もなく、四季凧は、その器具を、湿った布に、ぴたりと押し当てた。同時に、スイッチが入る。

「ひ、あああああっ♡♡!?」

振動が、クリへ直接響いた。指とは比べものにならない。逃げ場のない刺激が、一点に、絶え間なく叩き込まれる。

「あ、あ、っ、やだあ、!!!♡♡♡っああ!!! はなして!!! はなしてよおおお!!♡♡♡」

「ふふ、ちょっと大げさじゃない？」